

文化

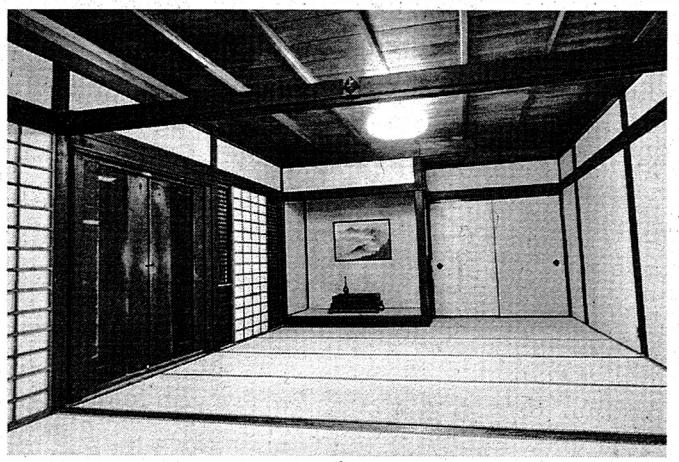
(一四三〇)「五〇八」の筆といふ奈良町最古の地図「大乗院門跡領指図」(江戸時代の写本を興福寺と天理大学付属図書館が所蔵)には、今西家書院と全く同じ場所に「禪光院家」、大乗院内の北西部に「松(すが)」(杉)御所」(2力所)の名が、それぞれ記されてゐる。

もと福智院家だった今西
家書院（室町時代中期、重
要文化財）は大乗院の御殿
を移築したという説が、奈
良文化財研究所の「名勝旧
大乗院庭園発掘調査報告」
以下、調査報告という二
などで否定されたことは、
前回（5月7日付「連載7」）
に述べた。

やまと 民俗への招待

今西家書院

の日記「大乗院寺社雑事記」
以下、雑事記といつに
記述がある。



今西家書院の主室（左が縁から出入りする入り口の板扉）。正面の床の間は江戸時代の追加で、当初はなかった。

院の杉御所を以て建立院
家となりす」という記述に基
づき、「トの地（今西家書
院の地）の変遷が不明確な
ので確定的には言えない」
としながら「今西家書院は
松（杉）御所が移築された
△福智院家又（また）は禪
光院家で書院を建立した」
という案を挙げ、移築の
伝承があるのを勘案すれば、
移築された可能性がや
や勝ると判定した。
「寺社雜事記」に禪光院
の記述

事、木阿弥之(れ)を所望す」△享徳四(一四五五)年三月一日「禪光院敷地を売却す」△康正三(一四五七)年七月十六日「木阿弥宿所 今日立柱上棟」これを読むと、禪光院は尋尊の時代には既に廃絶して更地になつており、それが木阿弥の居宅になつたとみるべきではないか。そうすると、「大乘院門跡跡領指図」に禪光院家が書き込まれているのが問題になるが、雑事記のこれらの記述や、図に示された中世の市

八) 年六月二十四日条には「福智院御所は則ち大慈三昧院殿(鎌倉時代の大乗院門跡)の御座所也。以て後は坊官住所と為(な)す也」という記事がある。

尋尊のお気に入りだった
延尙坊

今西家書院と同じ場所に
あつた旧禅光院の地は、木
阿弥が宿所を建てたあと尋
尊が亡くなる永正五（一五
〇八）年まで、大乘院で尋
尊に仕えた三乃（美濃）公
↓富寿丸↓延尙坊（出家後
の富寿丸）という居住者が

し、木阿弥時代には尋尊が
行向した記事はなく、可能
性は低いだろ。

福智院家に伝わった延専
移築の密殿

建築年代からみて、延専
がこの地を取得後、どこか
から移築したのではない
か。永正元年以降、尋尊の
行向が急に増えたのは、そ
れがきっかけになったとも
考えられる。

結論として、延専が移築

延専が移築した客殿

いつ記述がある。坊官とは福智院家のことと考えられ、賜ったという御所は町内ながら福智院にあつたことが判明する。従つて、福

追跡できる。このうち延専は、侍童だった宮寿丸のときから尋尊の大のお氣に入りだつた。

した客殿が福智院家に伝わった▽福智院家がこの地に移った十六世紀以降に移築した一のいづれかではないか。

今西家書院には主室の庭側に板扉が付いた入り口が設けられ、その上の屋根の此（ひさし）には格式を示す唐破風（からはふ）＝大仏殿の正面にもある、断面半円形の曲線を持つ屋根）が

た例もある。永正五年正月の「延寺坊行向」十八日十九日廿日」が尋尊の絶筆になった。

稿「今西家書院が日本の住宅史上に占める位置——大乗院御殿の移建説は成立するか」を参照いただければ幸いた。